Bibliophiles

ビブリオファイルズ　No.1(2018 年度)

新着図書案内・お知らせ　西宮東高校図書館

（ここで紹介するのは新しい本の一部です。）

『少年たちは花火を横から見たかった』
岩井俊二
『打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？』原作：岩井俊二　作：大根仁

イケメン映画監督・岩井俊二の出世作となったテレビドラマがあります。ストーリーは、小学生たちが駆け落ちするというものですが、これをアニメ化する案が出て、作者自身の推薦で大根仁氏が脚本を書くことになり、誕生したのが上の『打ち上げ花火・・』です。ちなみに、小学生という設定が中学生になるなどの変更があります。また上の『少年たちは・・』は映像化されなかった幻のエピソードなどを盛り込んで、作者の岩井自身が 24 年ぶりにリメイクした小説版です。

『まんが NHK アスリートの魂』シリーズ　　漫画：上地優歩　ほか

高梨沙羅選手があれほど遠くにジャンプできる秘訣は、彼女が 4 歳から習っていたある「習いごと」が深く関係していました。その習い事とは・・

サッカーの香川真司、野球の田中将大、レスリングの吉田沙保里など、トップ・アスリート達の挑戦の日々を漫画でどうぞ。

『コンピューター＆テクノロジー解体新書』　ロン・ホワイト　ほか

コンピューターとデジタル技術に興味のある人は、必見です。345 ページもの内容を誇りますが、コンピューターの基本原理から始まって、例えば「スマートフォンに指でタッチして操作する仕組み」とか、「マイクが音を聞き取る仕組み」など、私たちの身近な技術についても解説してくれます。イラストが非常に充実しているのも特長です。ちなみに、全国学校図書館協議会によって選定図書とされています。

『慰安婦の真実』
崔吉城（チェ　キルソン）

北米など海外でも慰安婦像設置の動きは止まらず、日韓両首脳の意向もかみ合わず、解決への出口の見えないいわゆる「慰安婦問題」。

本書は韓国出身の作者が、「慰安婦は強制連行されなかった」「慰安所は一種の事業所で、慰安婦たちは貯金もした」とするなど、慰安婦問題について「日本寄り」の立場から書いたものです。この問題を考えるヒントを見つけて下さい。

『orange』　　高野苺

「別冊マーガレット」に連載されましたので、ジャンル分けすれば「少女漫画」ということになりますが、実は**この作品は男子にも人気があるんです！**（思わず太字）それは、例えば宝島社の「このマンガがすごい!」の「オトコ編」で 15 位を取ったり、アニメや実写版の映画にもなっていることからも分かりますよね。長野県松本市に住むヒロインの女子高生は、2 年生になった 4 月の始業式の日、差出人が自分の名前になっている手紙を受け取ります。その手紙は、10 年後の 26 歳になった自分が未来から送ったものでしたが・・

『ライナスの毛布』　　高田ほのか

○しんにょうをスルリと描く祖父の手よ
　歩んできた道ぼくに聞かせて
○逢える日に一番綺麗になれるよう
　逆算しながら今日爪を切る
○突然に長くなりたる祖母の名に
　生きた証の一字を探す

昨年発表された歌集で、若手女流歌人・高田ほのか氏の最初の作品集になります。上の三首のように、比較的オーソドックスなものもありますが、ストーリー性のある小説の延長線のような連作短歌や、少女漫画に関連した短歌も多数あります。

『知識ゼロからのビットコイン・仮想通貨入門』　　廣末紀之

2008 年に「サトシ・ナカモト」なる日本人っぽい名前の人物が発表した英語の論文を元に、翌 2009 年から運用が始まった仮想通貨・ビットコイン。しかしこれにより巨万の富を得た「サトシ・ナカモト」の正体はいまだに不明で、「日本人にしては論文の英語がうますぎないか？」「そもそも、サトシ・ナカモトって一人の人間なのか、それともグループ名なのかも怪しい」などと様々な憶測を呼んでいます。そんな「怪しい・いかがわしい」イメージの仮想通貨ですが、データの不正使用や改ざんが出来ないなど、一般の通貨より優れた面もあります。この本は、仮想通貨の原理や運用の仕方がイラスト付きで分かりやすく解説してくれています。食わず嫌いせずに、ぜひご一読を。

『おしゃれ障害』　　岡村理栄子

ストレートパーマ剤の使用によりかぶれた肌、ピアスによる金属アレルギーやピアスケロイド、マニキュアの除光液によるかぶれ・・見たくないものばかり(笑)ですが、本書ではこれらがカラー写真でバッチリ見られてしまいます。今や化粧品はコンビニで手軽に買えてしまいますが、この本で「おしゃれ」の負の側面についても知っておきましょう。

今号のひとこと

I would rather walk with a friend in the dark, than alone in the light.
光の中をたったひとりで歩くくらいなら、
むしろ闇の中を友だちと歩く方がいい。
ヘレン・ケラー(1880-1968)

今年没後５０年となるヘレン・ケラーの言葉です。「見えない・聞こえない・話せない」の三重苦がありながらハーバード大学の女子校を卒業するという快挙を成し遂げた彼女の人生は、障害者のみならず、健常者にとっても大きな励みですね。日本にも３度訪れ、障害者に関する法律の制定にも大きく貢献しました。